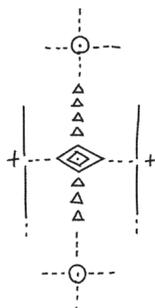


COSMOS集



原賀 瓊子選

「あすなる集」特選

古 墨 白木佳乃*青森

生きること以上にまめに大切に煤取り続け古墨ができる
 ストレスは「書かない自分」書くことで前向きになる心をつくる
 老いすぎた自分を映す洗面鏡せめて隣に薔薇でも置こう
 取り立てて希望もないが金木犀の香る入浴それは欠かせぬ
 筆を持つ一角獣になりきって墨の香かおりの中を彷徨う

宇宙に還る 押火 美奈子 千葉

ぱつちりと開きし猫のまなぶたをそつと閉ぢやる水無月夕べ
 真夏日にならん前にと巾ひをすまさせてくる猫のころろよ
 草いきれ六月の庭にさかんなり宇宙に還りしねこのたましひ
 猫ミルクもういらないとひつかきし我が手の傷もうすれゆく日々

ああ、あたし、強くなつたなあ ジャーキーが死んでからまた強くなつたなあ

正 体 福 島 健太郎 神奈川

明け方にわれに憑りつくマジシャンが今日の予定をふつと消し去る
 言ふほどの事ではないが立つたまま、まだ靴下をわれは穿ける
 いまさらに己を恃めば家中の壁や襖がカラカラ笑ふ
 五十年ともに暮らせるこの妻ひとの正体わからず、豆などを煮てゐる
 照りつける赤道直下の遙かにて材木座海岸の波乗り

請 百合の花 奥 浩 昭 東京

少年の日に見し花はなほ咲くや加計呂麻島の（請百合）の花
 草花の名にその花の在所見る（ウルップ草）や（波斯菊）など
 死を詠める歌あまたあり五十余の小高賢氏の『怪鳥の尾（けちよう）』には
 ふたたびの院浪人のわが前に姉は示しき（捲土重来）
 駅近き小路（こうち）にありし古書店の（田居）閉まりぬコロナ禍のなか

金 鳥 渦 卷 缶 奥 呂美生 東京

冬（ご）もり終へて缶より現るる蚊取り線香くちなはのやう
 ぶたさんに線香託し昼寝したお縁思はる風が思はる
 7時間蚊取り線香持続せりフルマラソンの制限タイム
 ちちのみの父の使ひし灰皿にゆるり落ちゆく線香の灰
 メモ帳に（蚊取り線香買う）と書く 金鳥渦卷缶の床見え

小田部 雅子選

雌 団子虫 小林 登喜恵 東京

梅雨晴れの朝の湿りの庭壁に勢揃ひする雌団子虫

めづらしき二色の小玉と見てる間に玉がはぐれて甲がふたつ
姿よき雄に群がる雌たちに人間社会を見てゐるやうだ

二時間を雌雄合体の団子虫いきなり雌が半回転す

湿りたるコンクリに落ち丸くなる茶色の玉を黒甲が抱く

私 の 私 清水 美里*東京

抜けたねじ巻きすぎのねじそうやって君が見ている私の私

どの服もからだに合わずどの水もからだに合わずいまだに裸
満面の笑みで挨拶したけれど私あなたを許してません

靴擦れの足にからだを乗せ歩くストッキングを早く脱ぎたい
想像が白旗を振るわたくしの傷つかないとわからぬ頭

漬物石 藤田 邦彦*東京

職探しままならぬとき父はひとり漬物石を河原に拾う

四回の転居のたびに父母は漬物石を持ちこびきぬ

三人で形見に分ける漬物石貧しき父母の懐かしきかな

上でつばめ下で叔父叔母はなす声 父の生家でごろ寝しており

電線のした通る俺につばめらは一瞥もなしはなしも止めぬ

更 地 佐藤 克子 新潟

酒蔵の屋敷の林をシヨベルカー五日うなりて更地としたり

酒蔵のやしきの樹々が伐られたり生れし更地に夏陽直射す

アリーナの長椅子の上カラフルに園児の数だけ締めく水筒

みどり濃き青田ひろり渺々と蒲原平野文月に入る

荒草を抜きて現るる人參のかよわき芽には如露の水やる

雲 蝶 の 彫 佐藤 多佳子 新潟

青々と広がる田中に永林寺杉の木立に守られてをり

風のみが吹き抜けてゆく本堂に金の砂吹く幢幡ゆれる

本堂の欄間欄間に雲蝶の彫の織りなす天上世界

白雲の中より現はれ青竜の色あざやけし江戸の末より

鑿を打つ音はもうせぜ雲蝶の作品のみが囁く本堂

大野 英子選

雲 紋 竹 岡田 美子*京都

お囃子のかすかな音に耳すます動画サイトの山鉾巡行

波迫るコロナ対策特になく人のあふれる祇園の祭

一輪の花の巡りは涼やかな風近づきて花ふるわせる

自転車を下鉄移動に切りかえて階段筋トレ始めたつもり

花散つて稲穂のような実をつけて雲紋竹は静かに枯れる

片付け名人 田原五郎*京都

まだふつと姿を見せる時がある行き場なくした野心家のトゲ
これもまた本能だろう生きるため支柱に巻きつく朝顔のつる
いくばくか羨望まじりながめてる背筋の伸びた少女の背中
注文はQRコードでするらしい顔を見合わすファミレスの席
誕生日ランダムすぎる部屋ながめなろうと思う片付け名人

千代紙三枚 沢田弘子 奈良

その歳で元気ですねと言ふ人よ人と会ふ度つくろふ九十歳
坂の上と下と互ひに手を振りぬ今日も元氣とゴミ出す朝に
大雨の降りしく朝に羽化したか松の木より降る初蟬の声
梅雨入りの宣言あれど暑き昼アガパンサスのむらさき涼し
疎開する吾を伴ひ店めぐり千代紙三枚買ひ呉れし父

浦島太郎の世界 桜庭 さわね 鳥取

老いゆくは淋しき傾斜布団干す力の失せて梅雨入りまちか
マネキンのイエローグリーンの特シャツを試着すれどもわれに似合はず
値下げ後のチュニック三百三十円いいね今日は良い日だとも
ミニトマトに米の磨ぎ汁やりながらさく声かく今年もよろしく
気化したるドライアイスの白煙に浦島太郎の世界に飛んだ

学級通信 戸田セツコ*広島

古棚の「学級通信」十冊のあの子にこの子花いちもんめ

夜なべ仕事ガリ板書きした日刊の「学級通信」昭和の教職
「黒い雨」ゆかりの町で反核と平和を願う草の根運動

三次に住み六十三年日の暮れは山家をつつむ夕映え恋し
母屋また土蔵もありて納屋もある山居の廃屋の光る黒瓦
水上 比呂美選

昭和の日付 西森 恭子 高知

明治より住みたる家族の使ひたる箆筒ふた棹夫の生家に
めづらしき長持竿の金具付く垣がれきたる箆筒に触れる
捨つるのはこころもとなしいにしへの箆筒ひと棹遺すと決めぬ
ふるびたる箆筒の底の錆びし釘夫は器用に取替へくれぬ
敷かれある箆筒の底の新聞紙昭和の日付は姑在りし頃

飯粒二つ 石本 洋子 佐賀

Tシャツの胸に飯粒二つ付けいよよ老人となりてしまひぬ
朝一番カーテン開ければ黄の薔薇の一輪が咲くわれを待つごと
ケータイの待ち受け画面に盧舎那仏取り込みよき事ばかりを願ふ
黒糖の飴を含めば沖繩の土砂降りの旅また思ひ出す
新しく連れ合ひを得て白鷺はきのふより二羽水張れる田に

恋はつらいね 柿原 和子*熊本

面会の姉の背中さみしそう再会叶わず姉は逝きたり
手を伸ばし老人センターで体操すマニキュア光る女性の多し

時々は忘れそうなる我が名前だれか呼んではくれないだろうか
透明のマニキュア塗って手をながめこつこつの指七十二歳
再会を運にまかせて期待して言葉に出せず恋はつらいね

言伝めきて 永松 たづ子*大分

捜す声ききしや夫の足もとの暗がりにある右の補聴器
早朝に積む古紙の上一枚の鳥の羽根あり言伝めきて

「そがんとか」せんば」とか言う島原の声音やさしき逝きし建ちゃん
日に射られ首から折るる山百合の褐色にやせたる花卉の朱の斑



鈴木 竹志選 「その二集」特選

鳩 時計 くだう れいん*岩手

暮らすとは洗うことだな ごわごわになってよく水吸うバスタオル
ロッキーサーモンあばらのように何本も吊り下げられている新干歳
頼ってくれたらと言いつつ頼られたところで二本しかないこの手
わたしもう、ずっとその先にいるんだよと言ってはいけないことだけ確か
強くなるほど孤独だよ 鳩時計は暗い朝焼けでも飛び出して

福田平八郎展、うろこ正しき鯉二匹まんまんと広き余白にいだかれ

雨 乞ひ鳥 牧鳥 幸造 鹿見鳥

この吾を童心にするかたつむり触つてみたくなる角の先
声すれど姿は見えぬあかしようびん(雨乞ひ鳥)の異名持つらし
長崎にわが姓と同じ島ありてコスモス誌で見ぬ いつか訪ねむ
連日の雨のあとには連日の猛暑攻め来るここ徳之島
天井より引きずり下ろし捕らへたり波布騒動の夜明けの鶏舎

ダンゴムシ博士 善如寺 裕子 群馬

三歳のわが家のダンゴムシ博士 背中まるめて夕焼けの庭
夕焼けは明日また昇る約束と疑ひもせず幼と眺む
「お日様はどこに眠るの」きつとあのお山の向こうにベッドがあるよ」
撫でやれば眠りながらに尻尾ふる言葉を持たぬものまごころ
行き先を犬に委ねて野を往けば時折止まり若葉風読む

雪華 凶説 谷 真樹*神奈川

母親が作法に厳しいひとなると箸なめながら話す友たち

だれひとり生者はいない白黒の卒業写真のような雪華図説
ひめしゃらのひと目で花が地に落つをしばしとどめることなどできぬ
美しく手放せずいたひとたちの顔によく似た水路のあじさい
てっぺんへ咲きのほるまでに返答の用意もせよと言う立葵

十 七 番 小林 宏 子*東京

真四角に刈られしつじ咲き並ぶ大きな母ケーキのように
十七番大谷選手の背番号ちよつと幸せ葉待つ間も

つゆはまだ明けぬというのにこの暑さ男も女も日傘さし行く
さくさくとオクラ刻めば刃先より大星小星とび散りてゆく
新聞紙なかなか頑固で半分に折ろうとすれど三角になる

み ず 玉 松下 誠 一*東京

夏草の各々にあるみず玉の映すセカイにわたしは居ない
桑の実の熟れて彩度を落とすととき僕にはツケが回ってくるの
さびしさを距離と換算したときにとりの区すら超えられないか
雨粒の重さに僕は冷えながら歩道橋からバスを見ていた
なんらかの工事途中の土手沿いをオレンジ色のフェンスがならぶ

大松 達知選

似たりけるらし 桜井 奈穂子 新潟

母の日はゆめ忘れねど父の日は二年に一度忘れてしまふ
幼年のわれの記憶のなかにある屋敷の森と茅葺の屋根

曾祖母に抱かれしわれは曾祖母に似たりけるらしみどりごなれど
かの山の中ほどにかつてありしとふ墓のそこひのうからいくたり
ひとけなき里の通りのまばらなる家の屋号をとなへゆく父

まあるく返す 平原 美 佳*静岡

いつだって強い日本が見たいから結果知りつつ見ている画面
蟬の声遠くに聞きて目覚めればそよ風の吹く寝てていいよと
既読つき待つこと五分LINE慣れない君とつながる時間
初盆のお飾りお供え意味ありてはおずき提灯母を誘う
十七歳幼き寝顔の君なればむかつく言葉もまあるく返す

ドライフラワー 小田 沙也加*愛知

百均のおもちゃ売り場は白けていて埃かぶったビー玉のあり
玄関に飾ったドライフラワーが不死身でうれしい 一人を暮らす
パステイスの淡い甘さを飲み込めばプールの後の眠気を思う
想像と味覚は仲間 「百年の孤独」はビターチョコの味がした
がむしゃらにやるしかないと言われた日 三割大きい歩幅で帰る

ヒュンとしたもの 川田 ゆかる*大阪

マラカスのリズムみたいに走りくる君をめがけてモフモフ子犬
手を振り合う君と私の間には梯子のような横断歩道
真向の風に自転車漕ぐ私の眉間に皺が集中していく
胸の間に一本の髪落ちるだけでヒュンとしたものに走る
わが部屋の切り花としての白百合は未来のための花粉を熟す

歩いていける 八木美和子*大阪

黒雲が連れ来る風のこの匂い 洗濯物を急ぎ取り込む
目を閉じた宙に流るる音を聴く盲導犬の耳は垂れたり
膨らんだオレンジ色の酸漿は優しき伯父の心臓みたい
雨だつて水たまりだつて長靴を履けばズンズン歩いていける
深緑の青に染まらず夏をゆくイロハモミジのくれないの旅

福士りか選

レタスのブーケ 山添聖子*奈良

花嫁のブーケのように朝採りのレタスを持ちて大叔母の笑む
ポケットの中から乳歯ひとつ落つ子の半ズボン洗濯するとき
さつきまで吾子の体であつたのに抜けた乳歯は物になりゆく
子の靴はどこかの砂漠とつながっているから今日も砂の湧き出る
白南風にシーツはためく羽ばたきの練習をするように何度も

富良野の風 川村りら*鳥取

写真だけ夜に送ってくる夫へ「キャブション付けよ」と一言返す
夫は今日ラベンダーを知つたらう富良野の風を吸いこんだだろう
上半分キツカリ空で下半分畑の続く動画が届く
大雨に窓開けられぬ日の続きジツトリしている畳も我も
蓮の葉の真中に揺れる水の球かくも危うい地球テラのバランス

こっこっこつ 舛岡慶子*広島

剪定の庭木すつきり整いて夏を迎える風が流れる
雨雲のレーダー見では空を見て降りやまぬ雨に花もうつむく
朝採りの青色きゅうりきざむ時こっこっこつとははずむ包丁
折れそうに重き柿の実かかえたる枝を支えてあわてて摘果
マーボーなすなすグラタンになべしぎと毎日なすの世界は広がる

チャージ 岡崎清和 香川

息してるだけの私の通帳にたびたびおはす税金たちは
用水の冷たき水で苗箱を洗へば終はることしの田植彗は
スパーで福沢諭吉がチャージされ夕餉のおかずに変はつてしまふ
田植彗機は一年に二日働いて後は黙つて納屋の片隅
時代よなドローンが飛んで肥料蒔く老いたる我に助つ人現る

活 力 小田美恵子*宮崎

週三のグランドゴルフを楽しめりクラブが杖の役目となりて
ホールインワンその瞬間の心地よき脚の痛さを忘れてしまう
拍手あり、笑い声あり、悲鳴あり二二時間かけて約四千歩
太陽が西に傾く時間にも東を向いたままの向日葵
猛暑日を耐え抜き夜のひまわりは活力もどし黄を主張する